



竹千代賞

人

上田 律

僕の名前は内川涼真。今年で中学二年生になる。学校では気の合う友人ができてある程度は学校に馴染んで生活を送っている。

でも僕は人間が嫌いです。

僕が日常生活の中でそんな風に感じたのは小学生の時からだ。といっても僕が小学生低学年ぐらいのころはただ楽しく過ごしていた。

ただそんな中で変化が訪れたのは冷たい風が吹き、枯れ葉が少し舞う寒い日だった。今思っても何気ない日常だったと思う。きっかけは学級の時間だった。当時よく一緒に話していた友人たちがうるさく、僕は笑いながら注意した。

一つ言っておくが僕は別に正義感が強いわけではない。調子にのってふざけすぎ、先生に叱られたことも多々あった。彼らとの違いはほとんどなかった。ちょっとした性格の違いはあったかもしれない。しかし、そこまでおおきな違いはなかった。

「流石にうるさいよ、授業中」

特に何も考えずに率直に思ったことを言った。ただ友人たちはそれが癪に障ったのか

「何様気取りだよ」

と言ってきた。僕はその時深く考えずに

「本当のことをいっただけだろ」

と言った。しかし彼らはそれに対し、

「別にお前に言われるようなことじゃねーし」

と一言。その時、僕は怒りが抑えきれず感情のまま

「黙れよ」

と言ってしまった。しまったと思った時には遅かった。子供が一方的に言われて黙っているはずもない。そこからは喧嘩になった。ずっと学校で、ともに生活していた友人がいきなり敵に変わった瞬間だった。心の底から理解をすることができなかった。僕としては事実を言っただけなのに。吹いていた寒い風がさらに強くなった気がした。

それ以降、学校では彼らとの間に確執が生まれてしまい、言い合いとは関係のなかった人たちとも話さなくなった。みんなも僕を腫物を見るような目で見ていた。自分が孤立しないようにするためには僕に関わらないのが正解だったのかもしれない。そしてそれは小学校を卒業するまで続いた。ただ、喧嘩が理由だったせいで避けられていると理解していた。また、僕自身も彼らやクラスメートと関わりたいとは思わなかった。

そんな中でずっと感じていたことがあった。僕は人間が大嫌いだ。

中学校に入學して全員がほとんどばらばらになり、中学には僕のことを知っている人間は誰もいなかった。僕としてはそのことがうれしかった。あいつらのことは嫌いだったがここでやり直すことができる。そこで僕は当たり前障りのない自己紹介をした。注目されるような生徒ではなかったけれど、友達もでき、授業でも発言



をして普通に生活をしていた。そこまで大きな興味があったわけではないが部活にも所属した。人数の少ない吹奏楽部だ。少人数のせいもあってか、部活の雰囲気は緩かった。僕自身もそこまで本気で部活に取り組もうと考えていなかったため、そんな雰囲気がちょうどよかった。

春の穏やかな日差しとともに、心配になるぐらいにただ日常が過ぎていった。本当に、ただ、ゆっくりと。ゆっくりと。

ただそこでまたあの出来事が起こった。

仲良くなった友人、菅野が授業中にゲームをしている姿が目に入った。学校では学習端末が配布されて以降珍しい光景でもないと思う。しかし、流石に授業中は違うと感じた僕は

「流石にやめとけて、あの先生、そういうのめっちゃ厳しいぞ」

と忠告をした。しかし菅野は鬱陶しそうな目で僕を見て、一言

「うるさい」

とだけ言った。ぼくは

「そうか」

と返した。菅野は何とも思っていないのだろう。しかし僕には、胸に変な痛みが走るのを感じた。この感覚は何なのだろうか。結局、友人なんて他人に過ぎない。気にしても無駄ではないか。

ただあの時とは違い、感情の制御がうまくなくなった。思うところはあったが僕はまた、いつもの生活に帰っていった。

遠くからは鳴くのが下手くそなウグイスの声が聞こえてきた。

次にそんなことが起こったのは学級委員長である酒井さんがクラス目標について話し合いを仕切っていたときだった。

「それでは今からクラス目標について20分間、個人で考えてみてください」

と酒井さんは言った。でも、流石に僕は意味がないと思い

「もう少し短くてもいいんじゃない？」

と提案を行った。おそらく彼女は今日の段取りをずっと考えていたのだろう。

「じゃあ、君がかわりに仕切ってよ」

とかなり辛辣な発言が飛び出した。自分としては簡単な提案のつもりだった。しかし、彼女にとっては気に食わなかったのだろう。僕の発言を無視して彼女の進行は続いた。また、僕の胸に小さな痛みがはったように感じた。

そんな些細な気持ちは普段の生活の中ですこしずつ、少しずつ積もっていった。

学校で前期が終わりそうになった時、大変だったが楽しかったな、と思っていたらまた一つの出来事がおこってしまった。クラスメートに僕の私物を壊されてしまった。相手も悪気はなかったと思う。僕はその時目の前にいた。悲しい気持ちにはなったがその瞬間は特にそこまで感じることはなかった。問題はその後だった。彼は特段謝るそぶりを見せず、その場を立ち去ろうとした。それには少しイラとした僕は

「一言ぐらい謝れよ」

と声をかけた。しかし彼は

「そこに置いておくほうが悪くない？ そんな端の方に置いておいたらおちるでしょ」

なんてのたまった。感情をコントロールできるようになったと思っていたが、それには少しイライラして

「でも壊したのはお前だろ」

と言い返してしまった。そこからは彼と言い合いになり、彼と話すことはなくなった。別に謝ればいいではないか。それほど難しいことではない。人として当たり前のことではないのか。急に何かがさめたような気がした。

こんなことが続いていた中で僕は思ったことがある。人に期待するから悪いのだ。期待をするから悲しく感



じるし、怒りがわく。期待といういいことのように思えるかもしれない。ただこれは、僕の価値観の押し付けなのだ。人のことに干渉しない。踏み込まない。これでいいではないか。

それまでうるさくないでいた蟬の声が急に静かになったように感じた。まるで夏ではなくなったかのように。やっぱり僕は人が嫌いです。

そんなことを考えて夏休みが開けた。そこからは何があるわけでもなく、普通の学校生活が再開した。たまにある小テストにむけて勉強をし、クラスメートと遊ぶこともあった。部活でも仲良くなった武田と話しながら楽器の練習をした。僕はトロンボーンを演奏している。そこまで上達したわけではないが、学校の校歌ぐらいなら吹けるようになった。部活の先輩も色々なことを教えてくれた。

僕の学校では十一月の終わりがごろに演奏会がある。人数が少ないせいで規模は小さいし、曲も校歌とその時に流行った2曲を演奏するだけ。ただ、みんなが演奏会を成功させようとしていた。

でも、だからといって僕はやる気があるわけではなかった。吹くことができればいい。また、友人や先輩などといったが結局は他人。部活以外では、深くは関わりすぎないようにしていた。何事もなくただ穏便に生活できればそれでよかった。これが正解なのだ。

そんな風に思っていたのに、今度は部活で問題が起きた。それは武田との衝突である。

武田はサックスを演奏している。一緒に練習をしていて感じたが、彼は本当に楽しそうだった。そのせいもあってか、僕よりも上達がはやかった。最初は武田がすこしはやく、曲をふけるようになるぐらいだった。しかし、時間がたてばたつほどその差は大きくなっていったように思った。演奏会まであまり時間がなかったことも、これがおこった理由のきっかけだったと思う。

「涼真、もう少し練習しようぜ、今のところひどかったぜ」。

武田からこのことを言われるのははじめてではなかった。僕はいつものように「ごめん、ごめん、気を付けるって」

と返した。いつもだったら武田も笑いながら「頼むぜ、ほんと」ぐらいで終わった。しかし、この日は違った。「ふざけてるわけじゃなくて、本当に時間がないんだって。俺がいった箇所って前回と一緒にじゃないか」

僕は「分かった。練習しておくよ」と返した。そしたら武田は安心したように

「そうか！ じゃあ、この後少し練習しないか」

と言ってきた。でもそれに対して僕は「やめておく」とだけ言った。しかし、武田からすれば僕が真剣じゃないように見えたのだろう。

「いつになったらやるんだよ！」

と怒ってきた。僕はそれが心底面倒くさく、ほぼ無視するような形で帰ってしまった。最後に見えた武田の顔がすごく悲しそうに見えた。

その後、僕は後悔した。あれでは生活に支障が出るではないか。明日、彼に謝ろう。

「武田、話がある。昨日はマジでごめん。感じ悪かったよな」

武田はそれに対し、「俺も強く言い過ぎたごめん」と言った。

その日は武田と一緒に練習をした。

「こうやって練習するの久しぶりだわ、やっぱこっちのほうが楽しい」と武田が言う。

ただ正直、心の底から謝ったわけではなかった。目立たないためには自分を出してはいけない。あくまで、普通の生徒であるためには必要なことだと割り切っていた。

その後、僕は形だけは自主練もするようにした。実際は自分が疲れない範囲で、最低限ができていれば良しとした。

そこからは人と付き合うことすべてが億劫に感じるようになった。そのため、生活に支障が出ない範囲で人と話さなくなった。会話もする、笑って話す。ただ、学校以外では関わらない。そんな関係だ。

結果的にいってしまえば演奏会は成功した。僕自身も、いつも通り練習を続けて、本番ではミスもなかった。



やはり、これで問題なかったではないか。

もうすぐ冬の寒さが本格的になってくる。気温が下がり、外はさらに冷え込んでいった。

そこからは何もなく、一年生として生活した一年が終わった。成し遂げたようなことはなかったが、初めての中学校生活をたのしむことができた。

ついに二年生になった。ただし一つ、一年生の時と違ったのが春の陽気を感じることができなかった。今年の春は去年と違う。

最初に学校に行って驚いたのは、席が一つ多かったことだ。みんなも転校生ではないかと盛り上がりつつあった。みんなも新学期であるにも関わらず、すでにグループができていた。同じクラスであったり、小学校が同じだったりなど理由は様々だったがそれにも驚いた。

朝、去年担任だった先生が入ってきた。するといきなり

「お知らせがあります。みなさん席について下さい」

と伝えた。みんなもざわざわしながら、やはり転校生ではないか、だとしたらどんな子であろうかと話しながら席に着いた。先生はみんなが席に着いたことを確認してから

「転校生の紹介です」

と続けた。すると、教室の扉が開き、一人の女の子が入ってきた。とても整った顔立ちの子で、クラスのみんなが少しざわついた。彼女は

「佐藤凜です、両親の仕事の都合でこちらに引っ越してきました。わからないことも多いと思うのでよろしくお願いします」

と自己紹介をした。みんなのざわつきが大きくなっていった。ただ、先生は冷静に

「これから始業式が始まるので出席番号順に並んで下さい、佐藤さんは七番になります」
とだけ伝えた。

そこからは始業式を行うため体育館に移動した。転校生がきた直後で、ざわついていたクラスメートたちも静かに整列をした。始業式は校長先生から話があり、これからの一年間の過ごし方の話があった。途中でクラス担任の先生の発表があり、うるさくはなったが、始業式は比較的スムーズに終わった。

その後の休み時間はみんな抑えていたものを開放するように、佐藤さんへの質問が始まった。佐藤さんも最初はびっくりしていたが、それに笑顔で答え始めた。彼女自身も嫌がっている雰囲気もなく、楽しんでいるように見えた。ただ、僕はどうせ彼女とは話すこともないだろうと感じ、特に彼女とは話さなかった。

そんな風に思っていたら、思わぬことがあった。彼女が吹奏楽部に入ってきたことだ。最初のイメージから、おそらく運動部に所属するのだろうと考えていた。そのため、僕は少し驚いた。そこでも彼女は

「二年の佐藤凜です。今年からこの学校に入学しました。元の学校ではトランペットを吹いていました」と明るく話した。そんな彼女は部活でも質問攻めにあっていた。

彼女はとても明るく、部活でも、クラスでもすぐに中心となっていた。明るくて美人。みんなが彼女のことを受け入れるのにそう時間はかからなかった。

一つ面倒くさいことがある。彼女は想いが強すぎるのだ。気持ちがあついてもいいのだろうか。とにかく、何にでも全力を要求してくる。それが僕からしては鬱陶しくて仕方がなかった。そう感じるのは当たり前のことだと思う。僕は穩便に、何事もなく生活できればそれでいい。全力などだす必要がない。良くも悪くも目立たなくていいのだ。彼女はすべてが僕の逆だった。

僕が佐藤さんと話したのは部活が最初だった。もちろん、僕から話しかけるわけがない。声をかけてきたのは彼女からだった。彼女は笑顔で

「内川くんだったよね、私は佐藤凜。知ってるかもしれないけどこれからよろしく!」と自己紹介してきた。特に彼女と会話をしたかったわけではなかったので「うん、よろしく」と一言だけ返した。しかし、会話はそこで終わらなかった。彼女は



「なんで吹奏楽に入ったの？」

「トロンボーンって難しくないの？」

と何個も質問をしてきた。面倒くさかったが彼女との関係に波風を立たせることだけは避けたかった。そのため、簡潔ながらも質問に答えていった。

「最後に一つだけ聞いてもいい？」

と佐藤さんが言った。僕は意識せず「大丈夫だよ」とだけ言った。

「私、内川君に嫌われるようなことしちゃってる？」

いきなり時間が止まったように感じた。部員が吹いている楽器の音が聞こえない。何故だ、笑顔で振るまっていたではないか。特に嫌がるそぶりも、嫌悪しているような表情も出さなかったではないか。

「違うって佐藤さん、涼真は女子と話さな過ぎで緊張してるだけ。こいつ、男子としかしゃべらないし」と武田の声が聞こえた。

「ほんとに？　じゃあよかった！　それじゃあね、内川君、武田君」と言って佐藤さんは去っていった。

「涼真、佐藤さんにあんなこと言われるなんて、どんな態度とったんだよ。確かに佐藤さんはめっちゃ可愛いけどさ」

と武田が冗談交じりに言ってきた。そこで僕ははっとし

「そんなひどい対応をしたつもりはなかったんだけどな」

と続けた。そこからはいつもの生活だったが、僕には急に佐藤さんが異質なもののようみえて仕方がなかった。

そして、夏休みがあけてすぐにある体育祭に向けて問題が起きた。佐藤さんとクラスメイトとの対立だった。練習について話していた時のことだ。

「これくらいスケジュールで練習していかない？」

と話す佐藤さん。正直言ってしまえば、それはかなり無茶なスケジュールだった。話し合いは少し険悪な雰囲気だった。全員が全員、体育祭に対してそこまで熱意があるわけではない。もちろん、すぐに反対意見が出た。

「流石に厳しくない？」

「そこまでしなくてもいいでしょ」

それに対して彼女は

「優勝したいでしょ？ それにやりたい人だけでもいいよ」

と話した。その後

「ちょっとでもいいから私はやりたい。楽しみたいし！」

と続けた。その時に僕が思ったのは他人に期待するだけ無駄だということだ。そんなことを言ったぐらいで人は変わらない。どうせ、少ししたら彼女も諦める。それは当然のことだし当たり前のことだと思う。誰も彼女が悪いとも思わない。そんな風に思っていた。

しかし、彼女は諦めなかった。最初は彼女と仲のいい友人たちだけで練習をしていた。練習はほぼ毎日続いていた。そんな彼女たちの姿をみてか、一部のクラスメートも練習に参加し始めた。彼女はともうれしそうにしていた。そして、最終的にはほぼ全てのクラスメートが参加していた。

僕には意味が分からなかった。なぜ、そこまで一つのこと全力を尽くせるのか。また期待しても無駄、としか思っていなかったのにみんなが参加しているのも理解ができなかった。

最終的な結果では体育祭は二位という結果で終わってしまった。でも一番熱心に練習していた彼女は

「悔しい！ 惜しかったね」

と笑っていた。

次にそんなことが起きたのは部活のことだった。すると、彼女が部活でも、いきなり部長に対して「もう少し練習時間を増やして演奏する曲の数を増やしませんか？ 今の感じだともう少しいけると思います」



と言いつ出した。心の底からやめてほしかった。僕はそこまで熱意があるわけではない。部活に時間をとられたくはないのだ。しかし、みんなの反応は僕と対照的だった。

「いいね」

「確かに、私もそう思ってた」

などと言いつ出した。それに交じって武田も

「だったら俺はこの曲をやってみたい」

と言いつ出した。部長もみんなのそんな様子をみてか

「うん、よかったよ。少し検討してみる」

と言いついた。ただ、検討とはいってもほぼ確定だろう。

その時、だんだんと日が落ちて、外はどんどんと暗くなっていた。

後日、吹奏楽部部員が全員、部室に集められた。最後の一人が部室に入り、全員が座ったところで部長が口を開いた。

「今年は演奏会でやる曲を一曲増やしたいと思います」

それを言われた直後に佐藤さんが

「やった！」

と喜んでいた。そしてみんなも彼女と一緒に

「よかったね」

などと口をそろえて言っていた。すると、武田が僕のところに来て

「どうした？ 何かあったか」

と聞いてきた。暗い顔をしてしまっていたのだろうか。僕はそれに対して

「別になにも。演奏会にむけて頑張ろうな」

と返した。できるだけ、明るく言った。そしたら武田は

「そうだな、一緒に頑張ろうな」

と嬉しそうに言ってきた。

そこからはみんな、練習量が増えたにも関わらずこれまで以上に楽しそうだった。僕も諦めて練習には参加したが、なぜみんながそこまで楽しそうにしているのかがわからなかった。僕にとっては、ただ練習量が増えたようにしか感じなかった。

そんなことがあってから少しして佐藤さんが僕に話しかけてきた。彼女とは自己紹介以降、ほとんど話していなかった。僕は彼女と話すのが少し怖かった。

「内川君、ここもう少しやってほしいんだけどいいかな？」

と聞いてきた。何故だ、別にそこは問題なく吹けている。特に直す必要はなかったはずだ。そう思った僕は「どこを直せばいいかな」

と聞いた。すると彼女は

「この音をもう少し小さく、最後の拍を意識して音をきるっていうのをやってほしい」

と話してきた。今までそんなことを一回も言われたことのなかった僕は驚いた。彼女は部活にどこまで求めているのだろうか。

その後もそんなことが続いた。

「内川君、もう少しその音を小さく」

「もっとスタックカートを意識して」

「クレッシェンドをもっとはっきりさせてほしい」

色々なことを言われた。ほかの部員はなるほど、確かに、などと言って喜んでいたが、僕にとっては面倒くさいだけだった。でも、最初のうちは僕もうなずいて彼女の話を聞いていた。だから、あれが起ったのは仕方



のないことだったと思う。

その日もいつものように練習をしていると、彼女が僕に話しかけてきた。

「内川君、三曲目の話なんだけどね…」

いつものように続いた。その日は、少し疲れていたことも原因だと思う。僕は自分で思っているよりも冷たく「別によくない？」

と彼女に対していった。すると彼女は一瞬驚いたような顔をしたが続けて

「でも、ここを直すとかなり良くなるよ」

と言ってきた。僕はそれに対してかなり強く

「流石にしつこいって」

と怒鳴ってしまった。ただ、彼女はひるまず、さらに

「でも演奏会を成功させたいでしょ」

と言ってきた。僕は言い返すように

「佐藤さんは細かすぎる、こっち側の気持ちを考えてすらいない」

といった。彼女は淡々と

「だって何も話してくれないじゃん、言ってくれなきゃつたわらないよ」

急に真実を言われたような気がした。確かに、僕は自分の気持ちを話したことがあっただろうか。彼女は行動しているが僕は逃げていただけではなかっただろうか。でも、僕の口からは咄嗟に

「うるさい」

という一言しか出てこなかった。佐藤さんが傷ついたような顔をして、僕が冷静になった時には遅かった。いきなり、周りの僕を非難するような目が、僕に突き刺さった。みんなも怯えていた。それに僕は耐えきれず、その日は部室を後にした。

部室をとびだした後は後悔しなかった。しかも、結局今回も逃げているだけではないか。僕はそんな気持ちを振り切るようにして走った。冷たい冬に体が沈み込んでいくような気がした。

その後、僕は何もかもやる気がわかず、次の日は学校を休んでしまった。心のどこかではこれも逃げではないかとも思ったが、僕はどうすればいいのか分からなかった。その日の夜、あんなことをしたのに「涼真、どうかしたのか。俺でなければ話ぐらいきくぞ」という武田からのメッセージが送られてきた。それをみて僕はさらに悲しい気持ちになった。

次の日、僕は学校に行った。教室では佐藤さんが心配そうに見てくるのが、更に辛かった。僕は彼女の目を見ることができなかった。自分のせいで彼女に迷惑をかけていることはわかっていた。でも、体は動かなかった。その日は吹奏楽部の練習があったが、僕は何も言わずに帰宅した。夜、スマホをみると一件の連絡が来ていた。それは佐藤さんからだった。内容は「武田君からアカウントを教えてもらいました。明日、二人だけで話したいことがあるのでお時間を下さい」という妙にかしこまった文だった。やはり、僕は彼女を怖がらせてしまったのだと気が重くなった。

また次の日、学校に行くだけでも嫌だった。そして昨日と同じように僕は授業の時間や昼休みも彼女と目を合わせなかった。

みんなが帰りますとき、僕は教室に残った。友人から「どうした、帰らないのか」と聞かれたが「ちょっとね」とだけ伝えて誤魔化した。最後に教室に残ったのは僕と佐藤さんだった。

そこから僕は、ただひたすらに、その重い空気に耐えるだけだった。彼女にどんな顔をして声をかけたらよいのだろう。どこを思い返しても自分に非があるようにしか思えなかった。

だが、最初に口を開いたのは彼女の方からだった。さらに、とびだした言葉は「ごめん！ 内川君」だった。僕は困惑した。何故、彼女が謝るのだろうか。僕の口から精一杯出てきた言葉は「うん」という短い一言だった。そして佐藤さんからどうしてあの時、怒っていたのかを聞かれた。僕は詰まりながらも本当のことだけを



話した。

「僕はそこまで演奏会に熱意があるわけじゃなくて、それは演奏会だけに限った話じゃなくて」

「そのせいで佐藤さんのことをすこし鬱陶しく感じていた部分もあって」

「というか学校自体もそこまで楽しめているのか分からなくて」

「そもそも人に干渉していいのかも分からなくて」

今まで誰にも言っていなかったものが急にあふれ出した。自分でも何故、こんなことを言っているのかが分からなかった。いつもはおしゃべりな佐藤さんも黙ってうなずきながら聞いてくれた。そして僕が話すのをやめたとき、佐藤さんはゆっくりと口を開いた。

「実はね、私もここに来る前の中学校でいじめられてたの、理由は簡単だったよ。内川君が言ったみたいに人に色々言い過ぎちゃった。こっちはみんなが受け入れてくれるけど、むこうでは無視されるようになってしまった」。

佐藤さんは少し冗談めかして話していたが僕は驚くしかなかった。そんな彼女に僕はあんなことを言ってしまったのか。そう思っていたらさらに彼女は続けて

「でもね、内川君。期待することと自分の価値観を押し付けることは違うと思うの。だって価値観はそれが絶対にそうなると思うことでしょ。私は人にいっぱい期待しすぎちゃうけど全部がうまくいくとは思ってないよ。でも、期待してたことがうまくいって成功したり、失敗しても思い出になったらすごく嬉しい。ちょっと子供っぽいかもしれないけどそう思ってる」

そう話した。僕の中に引っかかっていたものが少し溶けたような気がした。そして彼女は笑いながら

「でも、私の場合は人に期待をかけすぎちゃうから、参考にしちゃだめだからね」と言ってきた。僕もつられて笑いながら

「うん、ありがとう、そしてごめん」

と彼女の目をみて伝えた。すると彼女はいつものように嬉しそうに笑った。

その後は部活に向かい、みんなにも謝罪をした。みんな安心したように「だいじょうぶだよ！」と声をかけてくれたし、佐藤さんもフォローしてくれた。武田も

「まじで心配したから、涼真。学校帰るときになんかおごってくれたら許す」

なんて言ってきた。僕はいいやながら「仕方ないな」と答えた。話がスムーズに進みすぎて、拍子抜けした。なんだ、もっと簡単な方法があったではないか。

そこからは順調に生活が進んでいった。少し部活の練習は大変だったが、何故だか今まで以上に生活が楽しかった。また、あの一件があったことで、佐藤さんとの距離も近づき話すことが増えた。

演奏会本番、みんなはとても緊張していた。そんななか佐藤さんはいつも通り笑いながら「がんばろー！」と声を上げていた。演奏会が始まるまでは緊張していたみんなだったかが始まってからは問題なかった。演奏会は成功し、生徒の拍手に包まれた。みんなとても嬉しそうな顔をしていた。

演奏会が終わり後片付けが始まった。すると部長から「みなさん、お疲れさまでした」と声がかかった。去年は何とも思わなかったが今回は僕もとても嬉しかった。

その後は少し佐藤さんと会話をした。

「涼真くん、おつかれ！ 演奏会成功してよかったね」

「うん、佐藤さんもお疲れ様」

そしてまた佐藤さんは笑いながら

「涼真君とはいろいろあったからね」

と。その後佐藤さんはこんなことを言ってきた。

「どう？ 私には少し期待しても大丈夫だよ。約束はできないけどね」

なんて言いながらいつものように嬉しそうに彼女は笑った。僕は



「やめておく、佐藤さんは滅茶苦茶すぎる」

といった。だがそんなことを言いながらも、彼女の顔を見て、僕の心臓が少しはねたような気がした。ふと、こんなことを思った。なんだ、結局感情を動かされるじゃないか。やっぱり人間なんて、キライだ。